



民國佛教期刊文獻集成

任繼愈題



民國佛教期刊文獻集成

任紹愈題

第116卷

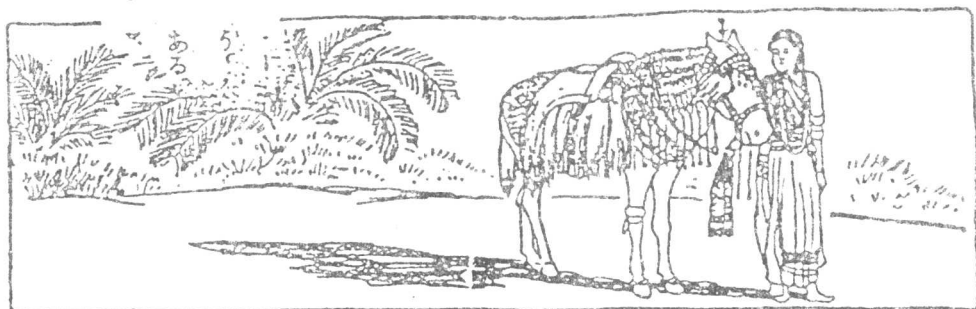


南瀛佛教會會報

全國圖書館文獻縮微復制中心

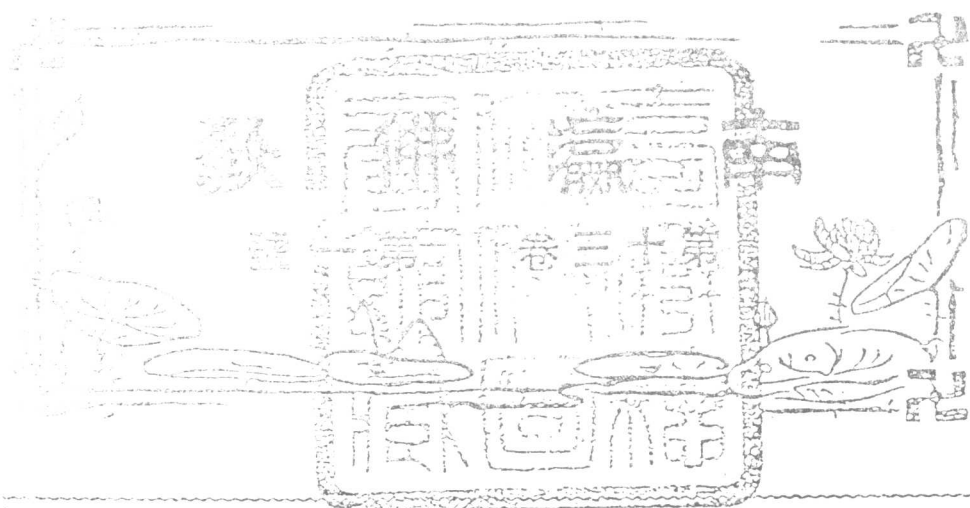


南 無 佛 尊 聖 行 大 聖 本 北



次 目

▲卷 頭 言	一
▲國民の覺悟と神	神月徹宗 二
▲信 の 徳	貫田至道 七
▲「いろは」の佛教精神	東海宜誠 三
▲習慣信仰に現はれたる神佛	編輯子 五
▲講 習 會 感 思 記	講 習 生 六
▲日 々 聖 典	三
▲對於臺灣佛教的希望	張 微 隆 三
▲非常時與家庭的經濟	曾 眞 常 四
▲臺灣佛教振興策	林 根 淨 六
▲記 憶 秋 梧 和 尙	中 華 慈 雲 六
▲答 陳 紹 復 先 生	薛 明 言 六
▲忠告「答煽動持齋食菜反對問題」	樂 世 俗 言 六
▲讀我來談々舊年吧	基 隆 梵 痕 七
▲南 瀛 詩 壇	四
▲會 報 雜 報	七
▲會費領收並新入會員紹介	五
▲編輯 後 記	五



吾人は多忙を極めた昭和九年を送つて茲に目出度も希望多き昭和十年の新春を迎へたのであるが、年々歳々、希望を以て迎へ、歳々年々、追憶を以て送つて來たのである。殊に吾人が追憶の時に於ては身も性も忘れんとするものであるが、僅かに前途に向つて希望の光を認め得た時に於てのみ慰藉あり、而して憂憤と向上があるのである。一年の計は元且に在りと云ふ古語のある様に吾人はこの新春に於て希望を立て、其の目標に向つて邁進努力致し、以て國家社會に貢獻することゝあらんとする者である。茲に左の五條を擧げて吾人の年頭に於ける希望とする次第である。

下、今日一日に再び来り難し、故に今日に於て懈怠することなく、所期の理想に向つて努力進捗すること。

二、小事は大事を要するの目には、小事と雖も之を輕くせむの機に注意するべし。

三、照福は不定なり、故に毀へ失敗することあつても決して失却をしない救に努めること。

图 1 控制回路中各元件的传递函数



國民の覺悟と禪

神 月 徹 宗

最近まで私の處で修業をしてをりました日系米國婦人からりました。一日京都に出て美しい西洋花を持つて歸つて呉れました。本人

は何思はず唯私の机を飾るつもりで持つて歸つて呉れたのでせうが私はこれを見て非常に考へさせられました。恰も此の咲き競ふ花の中に非常時日本に於ける或る物を暗示させられた様な氣がしました。かうして美しく咲いた花ではあるけれども唯根の無い悲しさには二日後に散るか又は三日後に凋んでしまふであらう。これに若し根が付いてゐたなら鉢に植えてでも、庭に移してでも、その培養一つ、成つて必ず又立派な花が咲き、何年も何年も繁茂されるであらう。それが唯一つの根が無い爲めに須臾にして凋落してしまふのである。只草花のみならず、總て此の世の中の事物は確固たる根本土と云ふものがなければ、一時の榮華は極め得てもソロモンのその如く遂に慘澹たる悲劇の幕を下ろさねばならないと殊更にその感

現代吾が日本が行き詰り抜いた物質文化の弊害はこゝ根本を三視して徒らに枝葉に走つた加減ではなからうかと思ひます。

明治初年以來吾が國民は、この物質文化の妖艶なる皮相美に眩惑し、一も西洋、二も舶來と國民舉つてこれが輸入に努めました。國民性を考へず、又事の取捨選擧を計らずに、無茶苦茶に取り入れた所謂根の無い文化にどうして美果の結實を期する事が出来ませうか。それは恰も木に縋つて魚を求むるが如く、全く不可能の事であります。硝子で製造した模倣品が、どんなに巧妙であり、綺麗であっても、其の中から眞の金剛石の光澤を見出さうとしたのは全くの誤りであり、無理な註文であります。内憂外患の此の非常時に際して吾々國民は津々浦々に警鐘を亂打し以て長き此の桃源の夢より覺醒して自力更生向上の一步を力強く踏み出さなければなりません。昔支那に一人の若い役人がありました。彼は非常に眞面目であり又勤勉家でありましたので遂に拔擢されて、或る州の知事に昇進し

たしました。彼は此の榮ある轉任を喜びながら自分の私宅から知事官舎へと家財道具を運び終つて、居間の安樂椅子にとつかと膝を下ろし、あたりの様子を眺め廻すと、下級官吏のそれとは違つて至れり盡せりで、何一つ不自由の無い完全な設備でありました。かうして彼はつく／＼吾が身の幸福を感謝してをりましたが、その刹那何となく物足りない様な心の淋しさを感じました。ふと氣付いて見ると自分の最愛の妻を同伴する事を忘れてゐました。何と云ふ馬鹿げた事であらう。然し最早や夕暮でもあり今と違つて昔の支那は至つて交通も不便でありますから、其の妻を迎へて行く事もならず非常に困つて懊惱の一夜を明しました、其の有様を見てゐた官舎の醫生は後に孔子先生の所に参りまして、「先生世の中には轉卒な人もあるものです。家移りする際最愛の妻を同伴する事を忘れて、狼狽してゐる人がありました」と申し上げると、先生は、「妻を忘れる位の事はまだよろしいが、世の中には自分の心を忘れてゐる人が澤山あるではないか」と訓戒されました。これは昔の譬へ話でありますが、自分の本心を忘却し、將た國民性を閉却した様な根の無い生活には必ず何かの缺陷が伴ふものであります。實際夫と妻は一心同體寸時も離るる事の出来ない相互扶助の關係を有するものであります。之れと同じく物質文化と精神文化、物質生活と精神生活は相離るゝ事の出来ない大切な關係を有するものであります。而して精神文化の

花は宗教であり、精神生活の根柢を培ふものは宗教である。されば宗教は物質と共に吾人の日常生活に片時も缺くべからざるものである。然るに宗教を老後の慰安物、死後の氣安め位に考へてゐる人はこの役人が夕暮に妻を求めて狼狽した如く、蛇足生死巖頭に立つた場合には最も大切な第一發端を没却して騒ぎ立てる人々であると思ひます。

元來吾が國が世界的に今日の地位をかち得た事は何に因るでありませうか。それは富の力でもなければ、學問知識の爲めでもなく、又武器の力のみでもない。こゝには他の國の人々が想像も及ばないそれ等の根本をなす所の餘い一つの力が存在してゐると私は信ずるものであります。それは申す迄もなく大和魂、吾が國固有の國民精神の力であらねばなりません。富強も武力も學問も此の大和魂を通じて發揮される時のみ偉大なる國民活動となつて現はれ、國民の地位を向上させる事が出来るのであります。而して我が國民は一様に此の大和魂を具有して居ります。之れが我が國の根強い所であり頼母しい所であります。然し如何に具有してゐてもそれを養ふ一つの要素がなくては十分に發育し完成するものではありません。例へばこゝに花の種を蒔きましても、植物の苗を植えましても肥料無くして芽生えも成長もするものでなければ、又良き花も咲かず實も結ばないと同様であります。然らば其の大和魂を養成して來た要素は

何であるか、吾が國民精神は何に依つて培養されて來ましたかと申しますと、それは宗教であつた事は論を俟たない事實であると思ひます。最近の譬へでありますが、宗教の國民精神に於ける關係は肥料が植物に對するのと同じ様なものであります。されば何んな肥料でもいゝかと云へば、さう許りは簡単に片付ける事は出來ませぬ。植物にも皆夫れ／＼に適した肥料があると同時に、吾が國民精神にも亦最も適應した宗教があるのであります。それに我が朝後來このかた千數百年の古い歴史を有する佛教であると云ふも決して過言ではないと思ひます。竊に我が國民精神は古來神儒佛三道に依つて培養されて來ましたが、その核心をなしたものは大乘佛教の精神であります。然るに維新以來此の尊い宗教即ち大乘佛教の根本精神、換言すれば精神文化を闕却した事が、延いて今日の場合に當つて狼狽しなければならぬ一つの遠因ではなかつたかと思はれます。一體此の宗教的內面の充實を缺如した皮相的な物質文化は外面的には如何に進歩發展はしてゐても、一度自省して振り返つて見た時には必ず落たされない一つの悩みを發見するものであります。恰度齒木が段々と太木になると、知らぬうちに内面が朽ちて遂に一寸した風に倒れてしまふと云ふ様な場合と同じであります。今や吾が國は外面は非常に發達して所謂「大日本」を形成しつつあるものゝ、内面即ち思想上には充實を缺いて段々良くない傾向を辿りつつある事を

如實に考へさせられるのであります。種しくは存じませぬが聞きます所に依れば、先年來陰鬱された共黨黨の中には、あらゆる階級の人々を包摂してゐたと云ふではありませぬか。此處を以てしても、愈々國家の將來が案ぜられ悲観な氣が致します。

私は此の頃色々關係上白人、殊に米國人に國と云ふ障礙をとり去り、人種的差別を超越した宗教的の交りも相當ありますので、種々たる事を聞かれますが、世界の富を一手に集めてゐる米國も今や日本と同じく皮相的な物質文化に行き詰つて來た結果、物質を豊富に有しながらも經濟的に行き詰り、多くの失業者を出し、茲に初めて物質生活の外に精神生活の重要な事を自覺し、佛教に依つて此の精神生活の光明を見出さんとして、ビルマやセイロンの佛教僧侶に依つて原始佛教即ち小乘佛教を研究信仰し始めました。然し乍ら知識階級の人々はこれらに飽き足らず、もう一步向上進歩したこの大乘佛教の研究に没頭する様になりました。中には萬里の波瀾を乗り越えてわざ／＼眞の道を求むる爲めに日本に來る者も出來ました。外國人さへも斯くの如くに大いに佛教に注目して來てゐるのです。吾々は折角かうした有難い佛教繁榮の國に生を受けてゐるのでありますから、之れによつて更生しなければなりません。時期は今です。唯々内視自省して横に廣き知識よりも寧ろ縦に深き國民精神の根柢を深ふ様に努力せなければなりません。所謂金もいらぬ地

位もいらぬ、命も惜しまぬ、と云ふ此の大乗佛教の眞精神に依つて新世界を展開すると共に今までの皮相的な物質觀念を無消費殺せしめて、新しく精神文化の理想境を築き上げねばなりません。これが眞の自力更生であり、吾が禪門に於ける無我の大活動であります。

さて禪とは何かと申しますと、經文に佛心是也とありまして、佛教各宗派はこの佛心から流出した思想でありますから、禪とは大きくいへば佛教を總括した名前であると申しても差支へないのであります。然らば禪の内容即ち佛心とは何であるか。其の首經餘は六年の長い間樹下石上に端坐内觀自省して遂に「奇なる培奇なる哉一切衆生皆如來の智慧德相を具有せり」と喝破されました。佛も吾等も同一佛性、同じ靈性の持主であると云ふ平等觀を證得されました。此の平等觀が即ち佛心であり禪であります。この絕對平等の立場より第一に説き出されたのが華嚴經であります。故に華嚴經に禪の解説であり哲理であると申してよいのであります。勿論禪の當體は不立文字教外別傳で不可説のものたるは申すまでもありません。さて此の華嚴經の哲理は次の如く區別する事が出来ます。理法界、事法界、理事無碍法界、事々無碍法界、以上を四法界と申します。理法界とは唯心主義、即ち精神生活の事であり、事法界とは唯物史觀、即ち物質生活の事であります。理事無碍法界とは靈肉一致、理性と感情の調和、物質と精神が一つになった生活で、此所に至つて初め

て吾々の理想とする平等和樂な世界が展開されるのであります。事々無碍法界とは絕對平等の世界から更に一大飛躍した世界で、此の世界には否定すべき迷ひもなく悟りもない。柳の緑、花の紅其の儘が直理の現はれである。淨土門の言葉を借りて云ふならば、娑婆即寂光淨土と申しまして、現實の世界此の儘が理想境たる極樂である。

己身の樂陀の常體であります。又學問的に云ひますならば、物質文化に精神的内容を有するものであり、精神文化とて物質的要素を排除するものではない。従つて兩者の區別はなく見様によつて物質文化であり又精神文化であつて、共に眞理其の物である、如上の見地に立つて世間を眺むるならば人種的差別をする事も無論愚の骨頂であります。延いては國と國との障壁を無暗に築いて相争ふなど無意味な事であり實に見苦しい姿であります。古來宗教家、殊に佛教僧侶は唯心主義に偏し、徒らに理法界の中に閉ち籠つて社會大衆に呼びかゝる聲がとどかず大衆の實生活に即せぬ憾みがありまして、この意の大乗佛教がありながら一般民衆から忘れられる傾きがありました。又一般社會人は物質主義に偏し、物質に依つてのみ總ての幸福が得られると云ふ唯物史觀即ち事法界の中にのみ生活して權利の享有の便得にのみ没頭して理法界即ち精神生活に進出しようと云ふ自覺が足りませんでした。爰に事法界と理法界、物質文化と精神文化、一般民衆と宗教家との間に遠い隔りが出来、其の隙を渡つてロシヤ

やアメリカから、吾が國民性にしつくりせぬ風俗習慣や、國體と相容れぬ最惡の思想のみが滔々と遠慮なく入り込んで來ました。之れが我が國民の内面を侵害して我が國今日の行き詰りを生じたのであると思ふのであります。

今や思想、經濟、國際上の非常時局に際會して、吾等宗教家は理法界より事法界に進出すると同時に、一般民衆も事法界より理法界に進み、双方歩みよつて理事無碍なる平等和榮の世界に入り、更に跳躍一番事々無碍なる生々發刺たる平和の世界を建設し、各國人をして我が大和民族の大理想を瞻望せしむるの固き決心がなければならぬのであります。こゝに於て、聯盟脱退の意義も愈々鮮明を加へ、無援孤立はやがて世界盟主の榮冠を戴くに至るであります。この大なる覺悟を固め、信念を決定する爲めに私は左の三綱領を提起して御覽めいたします。

朝は讀經靜座、晝は汗、夜は禮拜感謝で休みませう。

「禪的修業の詳細に就ては、到底申し上げることは出来ませぬが元來禪は體驗すべきものではありません。只々勇猛精進不斷の努力を實行してこそ破顔微笑の彼岸に到達する事を得るのであります。假令百座の講席に列し千卷の書をあさり萬の道理を極めても一つの自己自身を知ると云ふ事は容易ではありません。希くは前に提起致しました三綱領を朝夕實修されて、無我平等の自己を徹見し、死

んで佛となるよりも、活きた大心の衆生として活動し、以て我が大和民族の大理想實現に寄與せられん事を望む次第であります。斯くする事が大乘佛教の精神であり禪の本領なのであり、最も將來大切な國民の覺悟であります。

神月徹宗氏 號、清竹軒 ◇臨濟宗妙心寺派前管長兼團
經倫堂師家 ◇京都府葛野郡花園村妙心寺 ◇明治十二年兵
庫學生。大德寺派前管長見性宗般師に法を嗣ぐ。大正七年京
都市外八幡町妙心寺派專門道場圓福寺住職、後支那、暹羅、
ジャワ、印度を漫遊、十二年臨濟宗大學々長、昭和二年辭任。
管長就任。
——(讀者註)——

世界各國の國花

日 本……櫻	スペイン……橘
文 那……梅、牡丹	ギリシヤ……薔
印 度……け し	ペルシー……ひまはり
英 國……薔 薇	ベルシヤ……チュウリップ
佛 國……あやめ、百合	エヂプト……蓮
伊 太 利……雛 菊	アメリカ……山 楡 子
獨 逸……矢 車 草	メキシコ……さばてん



信

の

徳

屏東縣國語社

貫田至道

現代の世の中は、申までもなく、科學の發達に依る物質文化の世界であると云つて過言ではない。凡そ今日に於ける一切の文化批判

は、科學の説明のみ有効である如く考へられてゐる、言葉を換へて云へば、科學の無い文化は文化でないまで盲信されてゐるのである。しかし私をして云はしむれば、これは甚だしく物質的な考へ方であつて、全然人間の精神活動を無視して居ると思はれます。今假りに百歩を譲り、一切の世界が物質科學の世界であるとしても、その物質科學を産み出したものは單なる物質ではなく、物質を司る所の人間の、精神活動によつて裏付けられたものである。要するに精神文化を抜きにした單一物質文化だけの世界は絶対に此の世に有り得ないことを確信してゐる、否場合によつては、一切の物質を支配するものは、吾々の心の働く信念であると思ふものである。精神の力は如何に偉大であるか？信仰の力は物質文化を超越し、猶自己の靈光を照して、金剛の法劍を以て、一切の邪惡を活動する、そこで私達が其

の大信念を剛健にするには、宗教に遡入つて佛の道を正しく行ふことで、今日から明日に向つて進む生きた世界にある。

この死の苦痛と悩みに直面して、死の苦痛を助かりたいために、宗教に入るので、誰でも、どこでも、いつでも、願ひを捨てることが出来ない、又今日から明日へ生きて行くと、私と皆さん方との間にありて、親と子供、夫と妻の間に、兄弟朋友の間に、常に利害の相反することが多いのであります。この相反する關係を罪と申します。この時間上の死と、空間上の罪との、この矛盾に苦しむものは、この地上にある限りは誰でも、どこでも、いつでも、必ずあるのであります。これを救ふのが宗教であり、それが如來道の本旨なのであります。み佛様の御慈悲は誰でも、どこでも、いつでも、お救けにあづかることが出来るのであります。これが「吾子の道なり」と申されたのであります。

其の父の道はまだあらざるなりと、参究すべし、衆生に佛様から

向はせられた時は、吾子即ち衆生は吾子です、また子供から佛様に
向ふ時は佛様は衆生の親様であります、すると此の御言葉は其父な
る佛様の如く、「えらく」なつて來られよ、然らば助けてやるぞと云
ふのではなく、吾子なる赤兒にてどんなことでも、自分の力では何
も出来ない、惡人惡人であるその子供を救けるのが、如來の本願であ
つて、其父親なる佛様の如く、えらくなつて懺悔を成就し戒法を完
全に持つことが出来るやうになれば、教てやるぞと云ふ教では、い
まだかつて、あらざるなりと參學し、實究すべきであると、仰せら
れたのであります、だから一般世間に思ひ誤られてゐるが如くに禪
は特殊人のもので一般的の誰でも教かることの出来る宗教でない、
離行苦行なりと云ふ如き邪解を以て向つてはおらぬや、苟も正しき
宗教である限り誰でも、どこでも、いつでも、正しく教かり悟り得
るものでなければなりません、これが正しき禪であります。

そこで我れ／＼の行住坐臥の生活が、禪の宗旨と離れて遙遠いも
のゝやうに考へてはならぬ、禪の生活は我々の、平常底：魂を打ち
込み、大に活かして働くことと云ふことであります、常濟大師は「平常
心是道」とお悟の言葉があります、我々が毎日朝起きて顔を洗ふ、
飯を食ふ、仕事をする、夜になつて休むと云ふことは、熊でも同じ
くやつて居るが、さてその生活の上に魂を打ち込んで、やつて居る
ものがあるであらうか「その誰である」「何物である」と云ふそのも

のをシツカリ、見起けてその自在妙處が、ものにして居る人がある
であらうか、更に言換へれば二六時中を、良く使ひ得るものがある
であらうか、朝から晩まで自由自在に、隨處に主となつて、使ひ得
るものが幾人あるであらうか、これ實際信念の力と、道徳の力の問
題であり、信仰に生きて居る人の眞面目であり、そこで私はどうし
ても、内觀せよと勧めるのであります、内觀は「自分自身」を内觀
することと禪宗の謂ゆる「自己本來の面目」と云ふことにある、故
に先づその人自身に、ほんとうに信の力がある、心から信仰を大に
要求して深く信念のもとに尊き佛の道に精進するのである。

博多の聖福寺に住して居られた仙巖和尚は近世頂徳の師であり三
十年の永い間四來參禪の雲兄水弟を接得してゐた彼が偉大なる徳に
感化された逸話がある。數多の雲水の中に毎夜の消燈後密に寮舎を
出で寺の塀を乗り越えては紅燈籠町に通ふ二三名の若僧徒等は諸臺
を都合して塀の内に柵を置き足纏として出入してゐた、和尚早くか
ら知り抜いてゐた、併し一身の教化が未だ若僧等に及ばざるを深く
自分の不徳として一夜深更各寮を點檢すると果して漏放の數になつ
てゐた、和尚諸臺のある場所に行てそれを取り除くと同時に直に身
を以て諸臺の跡に臨陣して徹夜靜かに弟子達の歸りを待つて雞鳴曉
を告る頃一人一人と順々に例の方法で塀の内側へ乗り越えるのであ
る、石砌を下へ伸して諸臺を探る、少し妙だと思ひ圓い諸臺を探り

當て寺内へ降りて見ると師匠が端座敷目、自ら温顔に微笑さへ浮べ
てゐる、ハット驚いて思はず大地に平伏し、其次も同様平伏又次も
平伏し、異口同音に「何卒御許し下され」と其の罪を謝したまふ。就
樂の夢も何時しか醒め果て、誰も面を上げ得なかつた、和尚は唯一
言、「納はナ、吾等の不徳をお釋迦様にお詫びしようと思ふて自分
の頭をお前達に踏んで貰つたまでじゃ」少しも小言を云はず、和尚
の頭の上に今誰かの下駄に認いて来たものか馬の糞の碎片が乗つか
つてゐるではないか、笑ふどころか弟子達は唯々恐れ入つてしまつ
た、以後和尚の徳の力に依り信の徳を植付られ、淨化せる雲水寮舎
となつてお互の心に信の徳の力を以て日々行事に依り信の徳を現す
事を怠たらず精進したといふことである。

承陽大師は「この行事あらん身心自らも愛すべし、自らも敬ふべ
し」と曰はせられました、教へられただけでは足らぬ。自ら持つてゐ
る涙の泉を掘つて掘りぬく時に盡させぬ水、即ち信徳に湧き出で、
萬物を潤し純淨にするので、潤のない生活は堪へられないものであ
る。自他平等利益の爲に生き自らを生きし潤のある世界に淨化させ
るは是れ信の徳の力であると思ふのであります。

●靜寂……しづけさに居るといふことは、佛がすてよと仰せられた
る忍しき法をすてゝ盛らず、安らかに座することである。

四季十二ヶ月の異名

西洋では春分、夏至、秋分、冬至の入日を以て夫々春夏秋冬
の四季の初めとします。我が國では古くは正、四、七、
十月の朔日を以て夫々四季の初めとしましたが、今はそれほ
ど嚴密の規定はありません。但し中央氣象臺では二、五、八
及び十一月を以て春夏秋冬の初めとせられるさうです。
四季の長短は春、九十一日前後、夏、九十四日一時弱
秋、九十一日前後、冬、八十八日十五時強となります。
次に十二箇月の異名を掲げておきます。

一月 睦月・初春月・端月・子日月・霞初月・初空月・
太郎月・初花月・暮新月。
二月 如月・梅見月・梅月・雪消月・早咲月・衣更着・
小春生月。
三月 彌生・花見月・桜月・春惜月。
四月 卯月・夏初月・花殘月・卯花月・待鳥羽月。
五月 皀月・さくも月・田草月・早月・橘月・早苗月・
月不見月。
六月 水無月・風待月・常夏月・鳴神月。
七月 文月・秋初月・七夕月・相月・女郎花月・文抜月。
八月 葉月・秋風月・雁來月・月見月・葉落月・桂月。
九月 長月・木染月・いろどり月・蛸蛸月・菊月・小田河
月・紅葉月・梢の秋。
十月 神無月・小春・神去月・初霜月・時雨月・神有月(出
雲)。
十一月 霜月・神降月・子月・雪待月・霜降月・雪見月・
神樂月・鶯月。
十二月 師走・弟月・年よむ月・春待月・三冬月・極月・
梅初月。



——南瀛佛教講習錄——

「いろは」と佛教精神

龍泉寺住職

東海宜誠

●大乘求道の雪山行者

只今から「いろは」と佛教精神と言ふ題の下に四時間に亘りまして皆さんと講究して見たいと思ふ。先づこの題に就いて御話する前に其の豫備智識を得て貰ふために大乘求道雪山行者の御話から進めて行きまじやう。

總て何事に限らず一つの事を成し遂げんとするならば必ずソコに燃ゆる様な眞劍味がなければならぬ事は言ふまでもない事である。國語を研究するにしても裁縫を習ふにしても一度之をやらうと決心したら慥せずたゆまず眞劍にドーしてもコーしても上手になるまでやらうと骨折る處に趣味を覺へ妙味を得て自然に上達するものである。これは學問にしても何事でも同一である様に佛道を證得すには特にその信念の力が第一條件になるのであります。

私は先日國民精神作興週間の十一月十日には高雄におりました。

の日の午前八時から高雄神社で昭誓奉饗式が行はれるので参列する積りでしたが丁度家を出やうとした時來客の爲め時間が一寸遅れまして七時五十分を過ぎて仕舞ふた。

山の下まで人力車で飛ばしましたが八時迄は三分しかない。急いで山を登りましたが此の日は非常な暑さでカン／＼照りつける山道をあせつて登つたので非常に口が乾いてたまらぬが途中には水一滴ありません。

山上に着いて滾々と湧出る神水を一杯二杯三杯と頂きました。その時の清水の美味さ！實に舌笹の盃す所ではありませんでした。それから昭誓奉饗式が終つて神社では祭典が行はれましたのでこれに参拜して途中の要事を済まして家（慈愛院）に歸りましたが重食が選れて非常な空腹を感じました。

この様に口の乾きを覺ゆる時空腹を感じる時は眞に求めて已まぬ心持の通續であります。即ちこれは一つの例話でありますが佛の道

を求むるの心持に就いて釋尊は「法を求むる事渴者の水を求むるが如く飢者の食を求むるが如くせよ」と御遺訓遺ばされたのであります。

思ひまするのに世の中の一般を見ると或はお金を儲けやうと思ふていろ／＼手段を凝して却つて失敗する人がある。また自分の好きな人と一所になる事が出来ないで憎くて堪らぬ人と住はねばならぬとか、少し順調に進みかけたと思ふ中にまた不運が続くと言ふ様に世の中は誠に思ふ様にならぬ。苦しみの多い世界であると考へて來ると世を悲觀し、惡世觀に陥り、或人の歌に「世の中は四尺五寸になりにけり五尺の體量所なし」とある様にヤレ續道往生じや難殿の難じやと生きながら地獄へ御出張と云ふ段取りになる譯である。

・コ、に即ち心の定まり所、所謂信念と言ふものが出来ないといふも舵を失つた船の様な者で、眞に世渡りの上に危険極まるものである。

吾等の教主大聖釋尊も偉大な方であつたが矢張り求道の出發點は此處に在る。着くるに美衣錦繡、食するに山海の珍味、住ぶに金殿玉樓の身は皇太子様の尊ひ御位ではあらせられましたがこの心の上の苦み四苦八苦は誰れも一様である様に釋尊も之に大なる悩みを悩み／＼と感ぜられたとあります。

この悩みを轉じて悟りの境涯に到ると云ふ。即ち此の不勳の信念を得ることが佛教中の一大事となつておるので、孔子様も十有五に

して學に志し、三十にして精神が確立し、四十にして不惑と申されておる通り矢張り修業を積んで一大信念を得られたのであります。

然らば如何にしてこの大信念を得るか？ その眞實の大信念を得た有様は一覽ドンナ物かと問はれるとそれは言葉の上では或る程度までの説明は出来るがそれ以上は各人の實地體驗に待つより外はないのであります。

・コ、にこの大信念即ち佛の大智慧を獲られたと傳へられておる涅槃經聖行品の中に雪山の求道者のお話をするに致します。

さて雪山とは今日の學者は地理でヒマラヤ山と稱せられる印度北方の大山である。梵語學者の説ではヒマ(雪の意)ラヤ(藏の發)山高くして春夏秋冬四季山頂に幾萬年の雪を藏して居るからヒマラヤと言ひ漢譯して雪と申すのであります。

釋尊未だ出世せざる過去世に一人の波羅門があつて此の雪山で菩薩の行をして居りました。雪山の光景は誠に秀麗清淨で泉流あり樹林あり美花あり異香あり幽鳥の鳴舞あり恰も山水畫中の人であつたが切なる求道の心持には何一つとして面白くなかつた。只一心に思惟禪定に入つて大乘の法を得ずんば已まぬとの堅き決心をして修行三昧のみであつた。

或日天上何處からともなく忽然として一聲「諸行無常、是生滅法」の二句が聞えた、即ち此の行とは遷流と申して世間にありとあらゆ

る物の存在は一刻と雖もジツト同一状態ではない、悉く移り變るものであると謂ふのである。つまり世の中の人々は常に類みにならぬものを類みにして居るから當てがはずれるのである。一寸申し添へますが此の無常の義を只觀照的に考へ、不意の災難不幸に遭ひ取に人の死んだ時などによく用ひますが、無常とは常住不變ではない、つまり世の中にありとあらゆる物悉く變化するものであるとの意で、花の散るのが無常であれば開くのも無常、人が亡くなるのが無常であれば人の生れるのも亦た無常の作用、人が生長して大人になるのも畢竟これ無常であるからである。故に無常とは決して消極一方の目出度くない事のみが無常ではない。人間や社會の進歩發達も無常であるが爲めでありまして、コレは實に世の中の公理と謂ふべきでありましよう。

此の尊き眞理「諸行無常、是生滅法」の微妙の音聲を聞いた時此の行者の喜びは如何計りでありましたでせう。暗に明に還ひ、病人の名藥を得たるが如く、飢人の美食を得たるが如く眞に歡天喜地の心持に溢れた事でありませう。然し行者はコノ一句だけでは未だ安心をすることが出来ぬ、忽然として起つた此の「諸行無常是生滅法」は眞に有難く心肝に徹したが、扱てその後の一大安心の一句がなければならぬ。先の妙音の出所は何處であるかとあたりを見廻しましたが何にも見つかりません、サテどうした事かと心を靜めて一

寸左の方の大岩の邊を見ると羅刹と申しまして一丈餘もある巨大な體の大鬼が火を吐く様な口を開いて立つて居る。他には何にも居らぬ。行者は己を忘れて羅刹の前に立ち寄り、只今私の爲に甚深の妙法をお授け下さつたのは貴方であらうと思ひます、誠に有難い幸せに存じますが願くば私の爲めに亦た一切衆生のために其後の大事の句を授けて頂きたい」と虔願を致しました。

羅刹は答へて申す様、今の二句を唱へたのは誠に私である、然し私は此の數日間食物を發見しない、自分は六臂一肌へ一居る、次の偶文を受けと言へば知らぬでもないが私の食物に濫い人の肉、歟物は人の溫い血を要する、それでなければ自分の飢渴を滿し得ぬのである」とこれを聞いた行者はサテ困つた、自分の此の溫い體を要求されて居るのであるが一體自分の體がなければ法を聞いてもこれを行ふ事も他を益することも出来ぬ、サレ此の生身を犠牲すべきか、此の善き大事を聞き得ずに了るべきかを暫しに迷ふたが彼は遂に決心した。ソテ羅刹に向つて雪ふには「私は求道のためには身を棄て、も金剛菩提心(大覺念)を得れば恰も人に瓦器を施して七寶の寶器を得ると同じである、喜んで此の溫き生身を差上げます」と行者は自分の着ておつた獸皮の衣物を脱いてこれを數き羅刹を請しその前に座して一心に合掌して全身緊張した誠心をこめて後の一句を聴かん事を求めた。羅刹はこゝに於て「生滅々已、寂滅爲樂」と聲高く二句

を讀み上げた。彼は是を聞くと低頭頂禮して「コノ一偈四句を讀み、思惟して無上の大道を得たる事を喜び感々の岩石樹木等に響き付けて自分の死後、有縁の人々にも此の無上の真理を知らしめ、後世に殘さうとしたのである。やがて羅刹に身を供せねばならぬ時が來た。その時樹神が現はれて「仁者何をなさんとするか」と問ふた。彼の行者は「今我此身を擧げて大法を得んことを願ひ今此の稀有の法を聞きたれば約束通り我身を羅刹に供ぜんとす」と。樹神問ふて「その法何の用に立つものなるや」と。彼答てて曰く「此の四句一偈の妙法は實に凡天の諸見を打破し解脱の門を開く所の有難き全文である。これを自己が聞得たのみでなく世間一切の人々に普く傳へんとするものである。これが私の願ひである」と言ひ終るや樹上に登り將に羅刹の巨口に身を投げんとする時、羅刹は忽ち帝釋天と言ふ神様の姿に變り、兩手を上げて求道の行者を擧げたのである。此の時天上の諸神亦たその行者の堅き精神、立派な大願を讃嘆して「後世必ずや佛道を圖成して一切衆生の親とならんとその求道行者を禮拜供養したとの事である。

即ち世間の人々は、水泡の如き富貴、名譽、權勢、地位と言ふ様なものに腰掛けて、金剛不壞の大精神を求めて安住することを知らざるために一大鐵錘を下して、之を敲壞して代るにこゝには實の六生命を與へられた所以である。即ちこの寂滅爲樂の寂の一字こそ千言

聖學の眞訣活力の源動であることを知らねばならぬ。この寂の妙處を得んとせば常に深く座る所に愼獨靜觀の生活が大切である。即ち天地神明に應じざる清き心持を持續することが最も肝要である。普通の人はこれはなかく容易の事ではない。故に此に諸佛の名號を稱ふるとか、靜坐を行ふとか、常に寂定の體驗により心の力を養ひ心の光を發揮することに努めて實際その修養の力を養はねばなりませぬ。

④「いろは」の義理

いろは四十七文字は小公學校の一年生の時に學んで誰でもよく暗誦して居るがその由來、義理については多くの人が佛教精神とどんな關係を持つて居るかを知る人が比較的少ない様である。

「いろは」今から約千百年前天皇第五十三代 淳和天皇の御代弘法大師の作であると傳へられて居る。即ち前にお話しました涅槃經の聖行品中の諸行無常の一偈四句を此の「いろは」四十七文字の中にその深い意味を表されたと假名物語の中に傳へられて居ります。

(今茲に參照して、原字まで書き添へますが)即ち

以呂波に保へ止知利奴留選

いろはにほへとよりぬるぞ

和加與太禮音川彌奈良武

わかよたれそつねならむ

是生滅法

諸行無常